

日本と韓国のことわざ認知度

— ことわざスペクトル・リストに基づく調査 —

鄭 芝淑 (チョン・ジスク)

1. はじめに

日本では最近ことわざがあまり使われなくなっており、若い世代ではことわざを知らない人が増えているという声をよく聞く。韓国でもやはり同じようなことが言われている。稿者の直感としては、韓国では若い世代もことわざを使うかどうかは別として、知識としてはかなり多くのことわざを知っているように思うのだが、漠然とした印象に過ぎず事実であると断言する自信はない。

本稿の第一の目的は、日本と韓国のことわざの認知度、つまりことわざがどの程度知られているか、を客観的な方法によって調査し、日韓間の認知度の違い、および日韓それぞれにおける世代間の違い、男女間の違いを明らかにすることである。

ことわざの認知度を客観的に調査するという事は、口で言うほど簡単なことではない。単に客観的であるだけでは不十分である。認知度の調査として十分に信頼できる方法でなければならない。認知度を調べる完璧な方法は、すべての日本語話者と韓国語話者に対してすべてのことわざについて知っているかどうかを尋ねるという方法であろう。言うまでもないが、そのような国勢調査の規模を上回るような調査は不可能である。調査対象者も調査対象のことわざも選択する必要がある。どちらの選択も調査結果に影響を及ぼすが、ことわざの選択の方がはるかに影響が大きいと考えられる。適当に選んだことわざを対象にしたのでは信頼できる結果は決して得られない。選ぶことわざが違えば結果が大きく変わる可能性が常にあるからである。日本のことわざあるいは韓国のことわざだけの調査であればともかく、日韓のことわざの認知度の比較を目的とする場合には、結果の信頼性はほぼゼロに等しい。結果に対する信頼性を保

証するためには、調査対象とすることわざの選択そのものが客観的な手順に従って行われなければならない。

本稿の調査では、ことわざスペクトル (Paremiological Spectrum) という概念に基づいて作成されたリスト (以下 PS リスト)¹を用いて、調査対象のことわざを選択する。これによって、ことわざ認知度の日韓差、世代差、男女差に関する信頼できる客観的データを得ると同時に、結果の分析を通じて比較ことわざ研究におけることわざスペクトルの概念および PS リストの有効性・有用性を示す。これが本稿の第二の目的である。

2. ことわざスペクトル

ことわざは認知度、使用頻度、意味内容の重要度などにおいて一様ではない。ある社会のほとんど誰もが知っていて日常頻繁に使われている基本的なものから、ことわざに特に詳しい人しか知らないもの、一部の地域でしか用いられないもの、今ではもう使われなくなってしまったものなど特殊なことわざに至るまで様々である。

しかし、基本的なことわざとそうでないものとははっきりと区分されるものではない。認知度、使用頻度、意味内容の重要度などひっくるめて「重み」と言うことにすれば、ことわざの重みは光のスペクトルのように段階的に変異する。言わば、ある言語文化のことわざの全体は、非常に重みのあるものを中心として、非常に軽いものまで段階的に同心円状に広がるスペクトルとして捉えることができる。これを「ことわざスペクトル」と呼ぶことにする。

問題はこのようなことわざスペクトルをどのように規定するかである。様々な方法の長短を検討した結果、現在のところ、日本と韓国で過去 20 年ほどの間に発行されたそれぞれ 30 点ほどのことわざ辞典やことわざ集を資料として規定するのが最も有効で確実な方法ではないかと、稿者は考えている。簡単に言えば、収録している辞典の数が多いことわざほど「重み」があると規定する方法である。その作業は最終段階に入っているが、まだ異形の整理など微調整が残されている。本稿の調査で利用する PS リストは 2004 年 3 月初頭時点での暫定的なものである。ことわざスペクトルについては稿を改めて、その原理、利用価値について論じたい。

3. 認知度調査

ことわざの認知度、つまりことわざがどの程度知られているかを調査するには様々な方法が考えられるが、今回は暫定 PS リストに基づいて日本と韓国のことわざをそれぞれ 25 個ずつ同じ基準で選び、後半部補充式のテスト形式の調査を行った。各々のことわざの前半部だけを示して後半部を補うという形の調査である。

3.1 調査様式

認知度調査に用いることわざは次の手順で選んだ。まず日本と韓国の暫定 PS リストのそれぞれ上位 1500 件程度を、レベル 1 (最上位 100 件)、レベル 2 (次の上位 300 件)、レベル 3 (次の上位 300 件)、レベル 4 (次の上位 400 件)、レベル 5 (残り 400 件) のように 5 つのレベルに区分した。1500 件程度に限定したのは、これが中規模ことわざ辞典の水準であり、それを超えればほとんど知られていないものが多いため認知度調査には不適と判断したためである。各レベルの PS リストにおける点数とそれに含まれることわざの件数を表 1 に示す。

表 1 : PS リストのレベル区分

レベル	日 本		韓 国	
	点 数	件 数	点 数	件 数
レベル 1	26 点～	115	25 点～	123
レベル 2	18 点～	299	18 点～	292
レベル 3	13 点～	340	14 点～	325
レベル 4	10 点～	382	11 点～	421
レベル 5	7 点～	563	9 点～	488
合 計		1699		1649

次に、各レベルから後半部補充式のテストに適したことわざを 5 個ずつ選んだ。レベル格差ができるだけ大きくなるように、レベル 1 については最上位のもの、レベル 2 以下については大体中間位のものを選ぶことにした。選ばれたことわざのリストは次頁の表 2 の通りである。

これらのことわざの括弧内を空白にし、日本のものはアイウエオ順、韓国のはカナダ順に並べ調査用紙とした。学校などに依頼する場合には時間的制

約があるので、配列順序が結果に影響することも予想される。そこでそれを避

表 2 : 調査対象のことわざ²

日 本				韓 国 ³			
N	ことわざ	L	P	N	ことわざ	L	P
J1	犬も歩けば (棒に当たる)	1	30	K1	가재는 (계 편이다)	1	30
J2	帯に短し (たすきに長し)	1	30	K2	마늘 도둑이 (소도둑 된다)	1	29
J3	能ある鷹は (爪を隠す)	1	30	K3	믿는 도끼에 (발등 찍힌다)	1	28
J4	火のない所に (煙は立たぬ)	1	29	K4	마늘 가는 데 (실 간다)	1	28
J5	良薬は (口に苦し)	1	29	K5	말 없는 말이 (천리 간다)	1	28
J6	糞に懲りて (膾を吹く)	2	22	K6	눈 가리고 (아웅한다)	2	22
J7	泥棒を捕らえて (縄をなう)	2	22	K7	말 많은 집은 (장 맛도 쓰다)	2	22
J8	仏作って (魂入れず)	2	22	K8	무소식이 (희소식이다)	2	22
J9	骨折り損の (くたびれもうけ)	2	22	K9	벼룩도 (낮짜이 있다)	2	22
J10	桃栗三年 (柿八年)	2	22	K10	언 발에 (오줌 누기)	2	22
J11	磯の鮑の (片想い)	3	16	K11	안되면 조상탓 (잘 되면 제 탓)	3	16
J12	一銭を笑うものは (一銭になく)	3	16	K12	도둑맞고 (사립문 고친다)	3	16
J13	親の因果が (子に報う)	3	16	K13	두부 먹다 (이 빠진다)	3	16
J14	夫婦喧嘩は (犬も食わぬ)	3	16	K14	사또 떠난 뒤에 (나팔 분다)	3	16
J15	律義者の (子沢山)	3	16	K15	임도 보고 (뽕도 탄다)	3	16
J16	思う念力 (岩をも通す)	4	11	K16	개똥이 무서워서 피하나, (더러워서 피하지)	4	12
J17	口では大阪の (城も立つ)	4	11	K17	느릿느릿 걸어도 (황소 걸음)	4	12
J18	四角な座敷を (丸く掃く)	4	11	K18	못 먹는 잔치에 (갓만 부순다)	4	12
J19	空き腹に (まずい物なし)	4	11	K19	장사가 나면 (용마가 난다)	4	12
J20	腹の皮が張れば (目の皮がたるむ)	4	11	K20	콩밭에 가서 (두부 찾는다)	4	12
J21	商人は損していつか (倉が建つ)	5	8	K21	냉수 먹고 (속 차려라)	5	9
J22	今鳴いた鳥が (もう笑う)	5	8	K22	노루를 피하니 (범이 나온다)	5	9
J23	千石取れば (万石羨む)	5	8	K23	눈 먼 자식이 (효도한다)	5	9
J24	堂が歪んで (経が読めぬ)	5	8	K24	잔병에 (효자없다)	5	9
J25	名を取るより (実を取れ)	5	8	K25	흐르는 물도 (떠 주면 공덕이다)	5	9

けるため、それぞれ正順配列と逆順配列の用紙を作成して約半数ずつ用いることにした。調査用紙には、回答者の年齢、性別、身分・職業などの個人情報を問う設問も付け加えた。

3.2 調査時期と調査場所・回答者

調査は 2004 年 4 月～8 月に日本と韓国で行った。回答者は「中学生」「高校生」「大学生・大学院生」「学生以外 (49 歳以下)」「学生以外 (50 歳以上)」の

5通りの年齢層に区分し、それぞれの区分毎に100名程度の回答者を得ることを目標とした。

日本での調査は、学生については名古屋市内の中学校（1校）、高等学校（1校）、大学・大学院（2校）の協力を得た。学生以外の回答者については、稿者が教える韓国語教室の学生および韓国語・韓国文化に関する集まりの参会者、調査に協力していただいた中学校・高等学校の先生方、稿者が在籍する大学院の事務職員の方々、その他稿者の知り合いを通じて様々な方々に依頼した。学生以外の回答者の中には在日韓国人が15名含まれているが、いずれも第一言語は日本語であり韓国語はむしろ外国語であると見なすべき人たちである。一方、韓国での調査では、学生は、稿者の母校である韓国全羅道内の中学校、高等学校および大学の協力を得た。社会人回答者は、調査に協力していただいた中学校・高等学校の先生方、全羅南道内の会社の社員の方々、稿者の家族や親戚およびその知り合いに依頼した。

調査時間は特に定めなかったが、学校での調査は同時に行った共感度調査と合わせて20分程度であった。社会人の場合もほぼ同じ位の時間で回答できたようである。

回答者数は表3の通りである。

表3：回答者数

区分	日 本			韓 国		
	女性	男性	計	女性	男性	計
中学生	61	57	118	10	90	100
高校生	58	57	115	95	19	114
大学生	65	52	117	82	22	104
～49歳	72	29	101	26	90	116
50歳～	60	40	100	35	42	77
合 計	316	235	551	248	263	511

韓国の「学生以外（50歳以上）」の回答者が若干目標に達しなかったことを除いては、ほぼ予定数の回答者を得ることができた。男女別では、日本の場合女性が男性より3割程度多く「学生以外（49歳以下）」で2倍位の開きがあるが、その他の年齢層では大体半々であった。韓国では、総数は約半分ずつであるが年齢層ごとにかなりばらつきが生じた。

3.3 回答結果の集計

回答結果を次の手順で数値化した。

- (1) 各ことわざの正答を 1 点とする。異形として認められている表現はすべて正答とする。日本のことわざで普通漢字で書かれる語を仮名で書いたものも正答とする。韓国語の表記では、分かち書きの誤りがあっても正答とする。
- (2) 正答ではないが問題のことを不十分ながら知っているとは判断される場合は 0.5 点を与える。次のような例がこれに当たる。

漢字や綴りの間違い (J2 「たすきに流し」、J3 「瓜を隠す」、K1 「개 편이다」、K9 「낮잡이 있다 / 낮잡이 있다) ; 助詞の間違い (J3 「爪をもかくす」、J12 「一銭でなく」、J14 「犬でもくわぬ) ; 単語の置き換え (J6 「なますをのむ」、J8 「魂作らず」、J18 「丸くそうじする」、J25 「実を残す」、K14 「피리 분다」、K23 「봉양한다」、K25 「떠줘야 OK / 떠줘야 복 된다) ; 表現の脱落・添加 (J20 「目[△]がたるむ」、J10 「柿梨八年」、K3 「도끼에[△] 찍힌다」など)

日韓それぞれ 25 個のことわざを調査対象としたのであるが、集計の過程でそれぞれ 1 個ずつ複数の回答が可能であることがわかった。J7 には「繩をなう」の他に「見れば我が子なり」も可能であり、K21 には「속차려라」の他に「이 쏘시기」も可能である。したがって、これら二つのことわざは集計から除外し、日韓それぞれ 24 個のことわざを対象とすることとした。J25 にも、「実を取れ」と「得を取れ」の二通りの回答が可能であるが、これは同じことわざの異形と見なせるため対象から除外しなかった。

以上の手順によって得られた点数およびそれに基づく各種の平均点を認知度指数とみなすことにする。

4. 調査結果と分析

回答集計の結果得られた各ことわざの認知度指数は表 4 の通りである。最下段はことわざ全体の平均、総合は回答者全体の平均を表わす。L は PS リストのレベルを表す。

4.1 日韓差と世代差

表 4 でことわざ全体の指数を見ると、総合指数で日本 9.05、韓国 12.59、その差 3.54 とかなり大きな差が出た。年齢層別に日韓の差を見るとさらにことわ

表4：各ことわざの認知度指数

N	日 本						韓 国						L
	中	高	大	～49	50～	総合	中	高	大	～49	50～	総合	
1	0.95	0.97	1.00	1.00	1.00	0.98	0.88	0.96	0.93	0.93	0.75	0.90	1
2	0.44	0.62	0.49	0.86	0.98	0.66	1.00	0.99	0.99	1.00	1.00	1.00	1
3	0.87	0.94	0.91	0.94	0.92	0.92	0.99	1.00	1.00	1.00	0.99	1.00	1
4	0.49	0.76	0.87	0.98	0.98	0.80	1.00	1.00	0.99	0.97	0.99	0.99	1
5	0.76	0.85	0.91	1.00	0.97	0.89	0.96	1.00	0.99	0.97	0.97	0.98	1
6	0.03	0.07	0.20	0.22	0.44	0.18	0.82	0.96	0.92	0.99	0.94	0.93	2
7	—	—	—	—	—	—	0.12	0.28	0.07	0.21	0.05	0.16	2
8	0.03	0.03	0.06	0.39	0.75	0.23	0.99	0.99	0.99	0.98	0.99	0.99	2
9	0.76	0.77	0.79	0.87	0.97	0.83	0.49	0.47	0.45	0.74	0.75	0.57	2
10	0.64	0.73	0.75	0.97	0.98	0.80	0.49	0.91	0.82	0.63	0.59	0.70	2
11	0.01	0.02	0.03	0.24	0.68	0.18	0.86	0.84	0.83	0.95	0.95	0.88	3
12	0.55	0.70	0.60	0.71	0.72	0.65	0.07	0.05	0.03	0.19	0.11	0.09	3
13	0.03	0.01	0.02	0.39	0.79	0.22	0.09	0.00	0.02	0.13	0.19	0.08	3
14	0.11	0.18	0.33	0.90	0.96	0.47	0.18	0.13	0.13	0.58	0.82	0.35	3
15	0.02	0.05	0.01	0.09	0.35	0.10	0.86	0.97	0.93	0.98	0.97	0.95	3
16	0.03	0.05	0.06	0.10	0.30	0.10	0.99	0.97	1.00	0.94	0.92	0.96	4
17	0.00	0.00	0.00	0.01	0.06	0.01	0.01	0.01	0.01	0.13	0.10	0.05	4
18	0.08	0.07	0.04	0.41	0.79	0.26	0.00	0.01	0.01	0.16	0.06	0.05	4
19	0.01	0.00	0.01	0.01	0.12	0.03	0.01	0.00	0.00	0.16	0.08	0.05	4
20	0.03	0.03	0.00	0.08	0.25	0.07	0.08	0.00	0.00	0.34	0.21	0.12	4
21	0.00	0.00	0.01	0.01	0.04	0.01	0.16	0.23	0.17	0.36	0.42	0.26	5
22	0.12	0.21	0.15	0.71	0.76	0.37	—	—	—	—	—	—	5
23	0.00	0.02	0.00	0.00	0.05	0.01	0.06	0.11	0.01	0.47	0.58	0.23	5
24	0.00	0.00	0.00	0.00	0.05	0.01	0.03	0.00	0.07	0.38	0.66	0.21	5
25	0.04	0.06	0.11	0.42	0.73	0.25	0.00	0.00	0.00	0.12	0.55	0.11	5
	5.99	7.15	7.35	11.27	14.59	9.05	11.13	11.89	11.31	14.30	14.66	12.59	

ざの認知度の違いが明瞭に読み取れる。ことわざ全体の年齢別指数と日韓差を表にすると次の表5のようになる。日韓差の数値は日本の指数から韓国の指数を引いたものであり、したがって、マイナスの数値は韓国の方が認知度が高いことを意味する。

表5：年齢別認知度指数の日韓比較

区分	日本	韓国	日韓差
中学生	5.99	11.13	-5.14
高校生	7.15	11.89	-4.74
大学生	7.35	11.31	-3.96
～49歳	11.27	14.30	-3.03
50歳～	14.59	14.66	-0.07
総合	9.05	12.59	-3.54

これを見ると、一部順位が逆転しているが日韓ともに年齢が高くなるほどことわざ認知度も高くなっていることがわかる。さらに重要なことは、認知度の日韓差が年齢が高くなるほど小さくなっているということである。50歳以上では日韓差がほとんどないのに対して、中学生では倍ほどの開きがある。こうした調査結果は、本稿の冒頭に述べた日本と韓国のことわざの認知度に関する漠然とした主観的印象を明白に裏付けるものである。

稿者は以前に認知度調査の試験的形式として「10分間想起式調査」という方法を日本と韓国で行った。10分間に思いつく限りのことわざを書き出してもらった形式である。2003年3月～7月の期間に日本（回答者数350人）と韓国（同278人）で行ったこの調査結果と今回の結果を比べ合わせてみよう。10分間想起式調査の結果は表6の通りである。

表6：10分間想起式調査の結果

区分	日本	韓国	日韓差
中学生	14.9	13.6	+0.7
高校生	18.3	21.8	-3.5
大学生	17.1	21.0	-3.9
～49歳	10.6	16.6	-6.0
50歳～	13.7	19.0	-5.3
総合	16.4	18.5	-2.1

この調査でも、日本よりも韓国の方がことわざ認知度が高いという結果が出ている。しかし、年齢層別の認知度の変異を見ると、この調査結果は今回の調査結果とは大きく食い違う。表5の結果では日韓とも50歳以上の指数が最も高いのに対して、表6では日韓とも高校生が最も高い。また、日韓の差を見ても、表5では高年齢層になるにつれて差が狭まるのに対して、表6ではむしろ差が広がる傾向があり、中学生では日本の方が韓国よりも指数が高い。上に述べたように、今回の調査結果がことわざ認知度に関する直感的印象と符合するのに対して、10分間想起式調査の結果はそれと大きく食い違っている。もちろん直感的印象が正しいというわけではなく、それに矛盾しない分析結果だけが正しいということにはならない。しかしながら、この二つの調査には認知度の解明との関連で本質的な違いがある。今回の「認知度調査」は、どのレベルのことわざがどの程度知られているかを知るために、客観的な手順に従って設計されたものである。その結果の解釈において、認知度以外の要素が介入する余

地はほとんどない。ところが、「10 分間想起式調査」の結果には、ことわざを知っているかいないか以外の要因が関わっている可能性が大きく、認知度の指標としては信頼性が低い。なぜなら、与えられた時間内に想起できることわざの個数と知っていることわざ全体の数とは、必ずしも比例しないからである。ことわざを知らなければ想起することができないのは当然である。しかし、誰でも 100 個程度のことわざは知っていると考えられるから、もしそれがすらすらと想起できるとすれば、10 分間想起式の調査では差がつかないことになる。差がつくのは、知っていることわざの数が違うことよりも、即座に想起できる能力に差があるからである。頭の回転の早い若い世代に有利であることは言うまでもない。

4.2 男女差

認知度指数を男女別に集計して示すと表 7 のようになる。

表 7 : 認知度の男女差

区分	日 本		韓 国	
	女性	男性	女性	男性
中学生	5.92	6.06	10.95	11.14
高校生	7.39	6.91	11.95	11.58
大学生	7.18	7.55	11.34	11.11
～49歳	11.40	10.95	15.46	13.96
50歳～	14.63	14.54	15.04	14.35
総 合	9.35	8.64	12.52	12.65

これによると、日本では女性の方が若干認知度が高く、韓国では男女差はほとんどない。日本でも年齢層によって男性が高い場合もある。したがって、ことわざの認知度においては男女間に注目すべき差はないと見なすのが適当であると思われる。

4.3 PSリストの有効性

本稿の調査がPSリストに基づいて設計されたものであり、その調査結果の分析を通じてPSリストの有効性を証明することが本稿の目的でもあると述べた。そのことは、ことわざの認知度に対する直感的印象と合致する結果が得られたことである程度証明できたと考えられる。しかし、それとは別な観点からPSリ

ストの有効性を論証することもできる。表4の総合欄とレベル欄とを比べ合わせてみると、レベルが高いほど認知度が高いという傾向があることがわかる。これをより明確に示すために、各レベル毎に認知度の平均値を出してみると表8のようになる。

表8：レベル別認知度

レベル	日本	韓国
1	0.85	0.98
2	0.51	0.67
3	0.32	0.47
4	0.09	0.25
5	0.13	0.20

これによれば、レベルが低くなるにつれて認知度も低くなるという一般的傾向のほかに、レベル3とレベル4との間に大きな境界があり、レベル4とレベル5とでは顕著な差がないこともわかる。

個々のことわざを見れば、レベルと認知度が合致しない例もいくつか見られる。例えば、J6「糞に懲りて膾を吹く」、J8「仏作って魂入れず」、K7「말 많은 집은 장 맛도 쓰다」はレベル2であるにもかかわらず認知度は0.2前後と低い。逆に、K15「임도 보고 뽕도 탄다」(レベル3)とK16「개똥이 무서워서 피하나, 더러워서 피하지」(レベル4)は、レベルが高くないのにほとんど誰もが正答を与えている。しかし、このようなレベルと認知度の食い違いはPSリストの有効性を危うくするものではない。第2節の冒頭に述べたように、ことわざスペクトルは、ことわざの認知度だけではなく使用頻度、意味的重要性、「ことわざらしさ」などを含みこんだ「重み」というやや曖昧な概念に基づいて規定されるものである。上のような例によってその有効性が損なわれることはない。むしろ、重要なことは今回の調査によってPSリストが認知度を重要な要素として含んでいることが証明されたという点である。

5. おわりに

今回の調査の結果、日本と韓国のことわざ認知度に対する漠然とした直感的印象を裏付ける結果が出た。また、PSリストに基づくレベル区分と認知度に明らかな相関があることから、認知度調査におけるPSリストの有効性も示す

ことができた論じた。しかし、これで万全だというのでは決してない。偶然という可能性が排除できないからである。偶然という要素をできるだけ排除するために PS リストを利用して調査対象とすることわざを選んだのであるが、その選択の際に偶然という要素が入り込む余地がないわけではない。したがって、今後の課題として、同じ手順で選定された別なことわざの組を対象にして、同じ規模で調査を行う必要がある。あるいは、今回採用した後半部補充式の調査ではなく、より多くのことわざを対象にできる一語補充式の調査もやってみたい。その結果、日韓間や年齢層間に今回と同様の認知度の分布が確認できれば、PS リストの意義と有効性は一段と明確になるだろう。

最後に、今回の調査が裏付けた認知度の日韓差の原因と推測されることについて触れておきたい。韓国の若い世代が日本の若者よりことわざをよく知っている最大の理由はおそらく PC の普及であると思われる。現在、韓国では中高生のほとんどすべてが PC に親しんでいる。その入力操作を習う過程でことわざに接するのである。インターネット上にいくつかのハングル入力練習ソフトが提供されており、無料でダウンロードして使用することができる。そうしたソフトのどれにも、短文入力練習用としてことわざが用いられている。例えば <http://www.software.myfolder.net> にアクセスすると、『한메타자교사』(491件)、『측지타법 v2.1』(478件)、『뽍뽍이 타자 v1.0』(748件)、『general typing v1.0』(1134件)のようなハングル入力練習ソフトが利用でき、それぞれ括弧内に示した件数のことわざが用いられている。したがって、PS リストのレベル3程度までのことわざに接する機会が誰にもあることになる。日本でも若い世代のほとんどが PC を使っていると思われるが、ことわざを用いた入力練習用ソフトの話は聞いたことがない。これは、おそらく、日本語と韓国語で文字入力の難しさが異なるためではないかと考えられる。韓国語は閉音節言語であるため開音節言語の日本語より音節数をはるかに多く、また、日本語とは違って分かち書きという表記上の規則もあって、正確な入力に習熟するにはかなりの時間を要するのである。若い世代におけることわざ認知度の日韓間の差はおそらくこのような理由によって生じたものであると推測される。

今回の調査では、後半部補充式の設問に対する回答結果をことわざ認知度指数とみなした。しかし、それはことわざの表現に関する調査結果であるに過ぎず、ことわざの意味内容についてはまったく問題にしていない。表現としては知っているが、意味は理解していないということも十分にあり得る。韓国の若

者がことわざを知っていると言っても、実際にはそのレベルであるかもしれない。ハンゲル入力練習ソフトにはことわざが使われているけれども、その意味の解説はまったくなされていないから、その意味が理解されているかどうかはわからないのである。韓国の PS リストの作成に用いたことわざ辞典のほとんどが過去 10 年ほどの間に出版されたものであるという事実が、このことを裏付けているように思われる。今回の調査結果とことわざを本当に知っているということとの大きな距離があり、ことわざの真の認知度を知るためには、本稿の調査とは別な方法による別な視点からの調査が必要である。

注

- 1 PS リストとは、鄭 (2004a)、鄭 (2004b) で「順位付けことわざリスト」とか「重み付けことわざリスト」と呼んでいたものと同じである。
- 2 N 欄は以下本稿でことわざを指示するのに用いる番号、L 欄はレベル、P 欄は P S リストにおける点数を表す。
- 3 韓国語の諺の日本語訳は次の通り。K1：ザリガニは (カニの味方)、K2：針泥棒が (牛泥棒になる)、K3：信じていた斧に (足の甲を斬られる)、K4：針行くところ (糸も行く)、K5：脚のない言葉が (千里行く)、K6：目を蔽うて (ニャオという)、K7：口数の多い家は (醤油の味も苦い)、K8：便りのないのが (よい便り)、K9：蚕も (面を持っている)、K10：凍えた足元に (小便かけ)、K11：うまくいかなければ祖先のせい (うまくいけば自分の手柄)、K12：盗まれて (萩の戸を直す)、K13：豆腐食べて (歯が抜ける)、K14：殿様去って (ラッパ吹く)、K15：君にも会うし (桑も摘む)、K16：犬の糞が怖くて避けるか (汚くて避けるのだ)、K17：のろのろしても (赤牛の歩み)、K18：食べられない宴に (笠つぶす)、K19：壮士出でて (竜馬出ず)、K20：豆畑で (豆腐を求める)、K21：冷や水飲んで (冷静になれ)、K22：ノロシカを避けると (トラが出る)、K23：目の見えない子が (孝行する)、K24：軽い病に (孝子なし)、K25：流れる水も (汲んでやれば功德)

参考文献

- Wolfgang Mieder (1995), *Paremiological Minimum and Cultural Literacy*, *De Proverbio*, Vol.1, No.1
- 鄭 芝淑 (2004a) 「ことわざに関する対照研究の新しい試み」『多元文化』(名古屋大学大学院国際言語文化研究科国際多言文化専攻) 第 4 号
- 鄭 芝淑 (2004b) 「10 分間想起式アンケートによる日韓のことわざ調査」『ことわざ』(ことわざ研究会) 第 3 号